



岩本夏月／ナツキ

ポートフォリオ 2022-24

ステートメント（制作の「イメージ」）

存在の周縁のノイズのような断片がオブジェクトに変換され、あるいは空間に表出されていく。私は無意識的なものについて、精神空間の構造について、（別の）世界への直感について、現実との戯れについて、実存感覚について etc..一手を動かして絵を描いたり素材と遊んだりそれらを空間に配置したりしながら探求している。

私は特に、物語には汲み取られないような、その前の言葉や声自体のようなものを聞こうとしているように思う。それは存在や時間のあり方が多様化し、曖昧な存在や情景が行き交う、あるいは些細な不満、印象、愛情、混乱、遊び心、あるいは抑圧されたエネルギーそのものが浮遊しているような領域である。

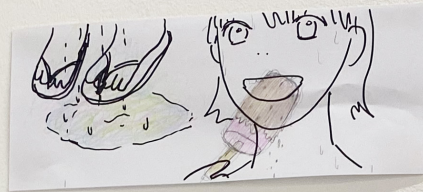
私の制作を特徴づける不完全性、中間性、もろさ、幼さ、素朴さ、カジュアルさといった「マイナスや控えめ」の美学はそれらに語りかけるための言語として作用しているだろう。それはドローイングや日本の美学といった文脈に根ざしているものでもある。また、しばしば日常的な物や空間（例えば、付箋、リネン、リビングルームなど）の表面に絵・作品を展開するのも特徴で、それにより精神的、身体的、日常的な体験を同時に引き出す複雑なイメージの場を作ったり、想像の世界と日常の世界がスリップしていくような構造を作ったりする。

ランダムに流動しながらも同時に何かを探しているその精神的・身体的活動の痕跡のような、エネルギーの行き交う中間的領域のような、人間の心と建築空間を別の（デリケートな）領域へとチューニングするような、精神のストレッチの触媒のような、日常の中のノイズがニキビのように吹き出すような、つかみどころのない世界を撫でるような、あるいは精神、空間、日常空間を行き交うノイズのジャムセッションにもなるようなーそのようなものを作ること、その行為そのものに意味を見出し、癒しを得、神秘を感じるのだ。



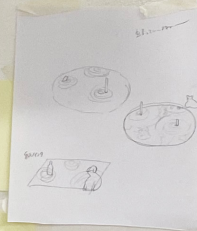


スタジオの様子、2023年Camberwell College of Arts にて



The border of self / de composing self

心象風景 自己像/自我像
The image of landscape, figures in me.
Imagetic process, for meaning



Cell division

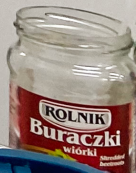


Dogs are watching a baseball game.
It's a baseball match.
Baseball match I

Self

Isolated - Isolated
Isolated - Isolated
Mirror self is not isolated
Isolated - Isolated
Isolated

Ventilation



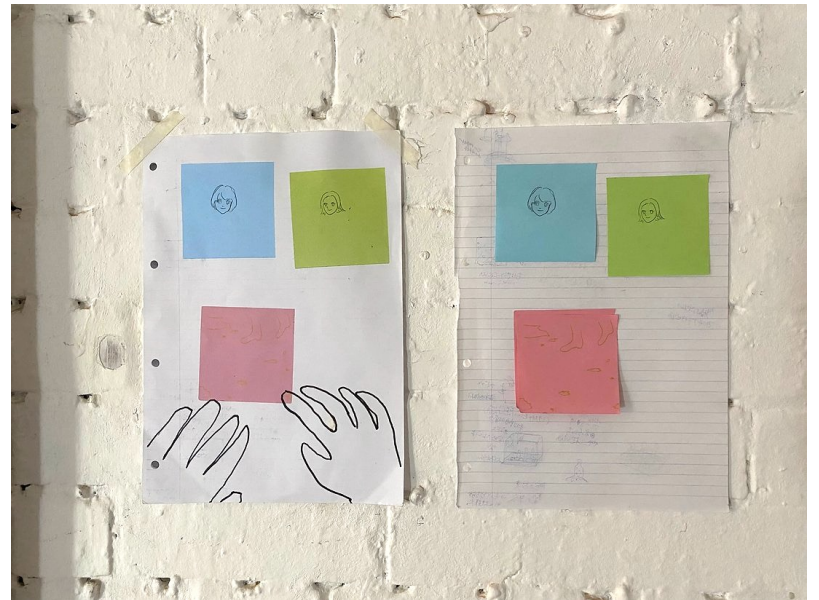
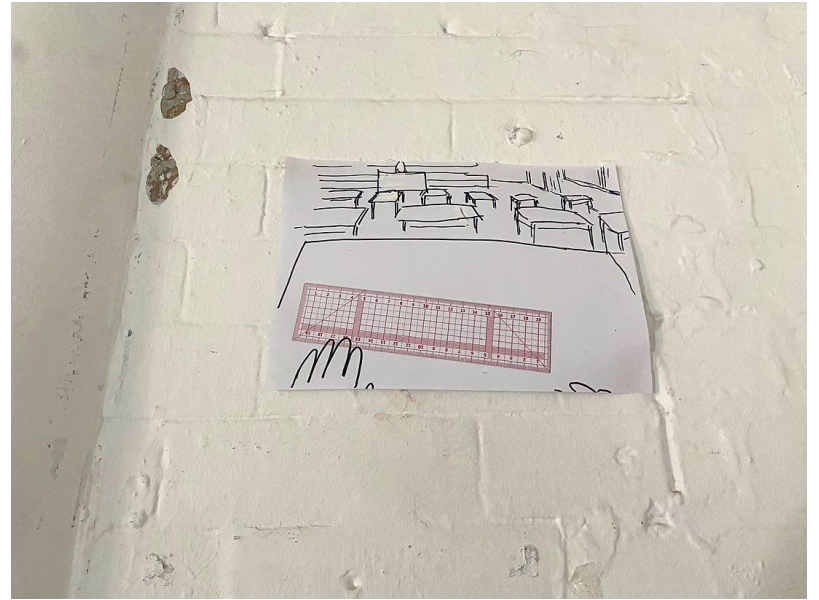
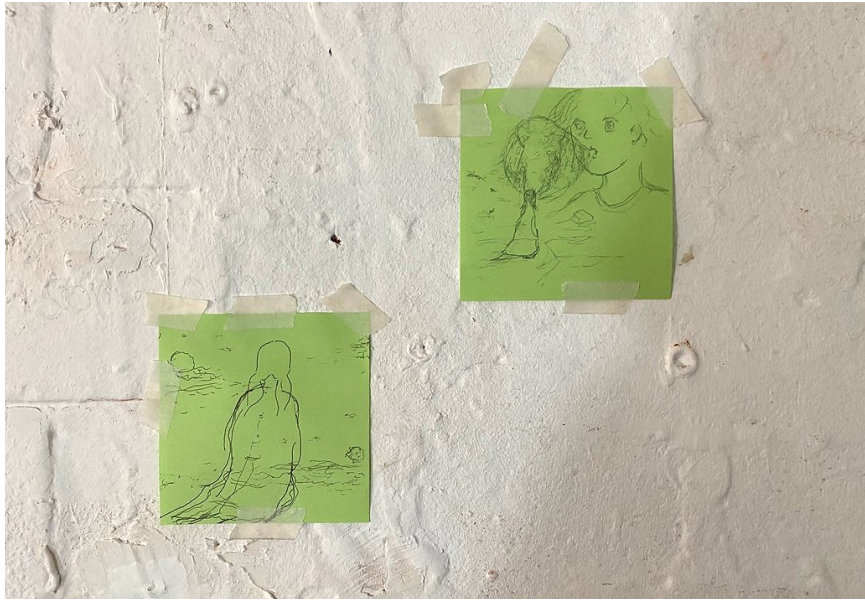
2022-23 (Camberwell College of Arts 在学時)
インスタレーション

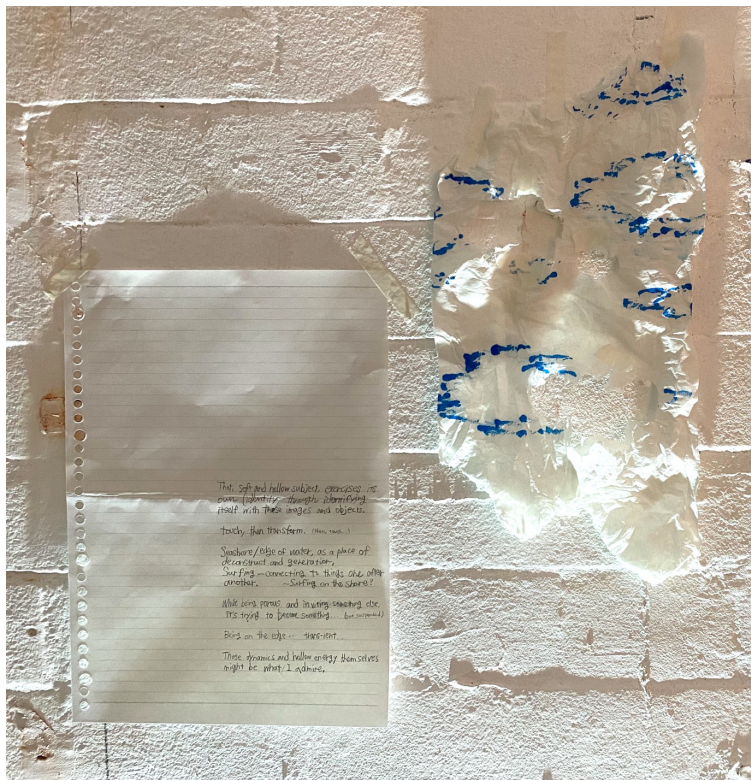


Trans-ient - surfing on the edge / soft and hollow you / April 2023, Installation

Exhibited at "spectrum", Bargehouse Gallery







Thin, soft and yellow colored, processes as
 some (perhaps... maybe... something)
 float with these angles and objects,
 tracky than the form... (m... m...)
 Spacious/obscure as water, as a place of
 (re)connect and (re)connect
 Surfing—connecting to things and other
 another... —Surfing on the clouds?
 While very close and in a way reaching else,
 its trying to (become something... but...)
 Back on the edge... surf-surf.
 These dynamics and hollow energy themselves
 might be what I admire.

流動する世界観や「柔らかなアイデンティティ」の領域を総合的・全体的に表そうとした展示。

この展示空間は大きな廃工場の中の小さく暗い部屋であった。その周縁的な雰囲気と共鳴し、世界の果てで起きている一種の代謝のプロセス—、さまざまなものが生まれ、変化し、消えていく海岸のようなもの、あるいは身体の隅々で起きている変化／誕生のダイナミクスをイメージした。またそれは子供のような柔らかで危うい世界観とも結びついていた。それらのイメージがドローイングの内容からインスタレーション全体構造まで響き渡っている。

インスタレーションのレベルにおいて、ものの配置の水平方向の流れや横滑り、そして中空の構造が出来上がっており、それはメンタルスペースの構造やある種の生命観、世界観を寓意的に翻訳したものであった。そのような全体的・有機的な表現方法はドローイングを用いたインスタレーション作品においてよく探究している課題である。

「やわらかく空洞のような主体（あるいは子供）は、これらのイメージやオブジェと自己を同一化することによって自己のアイデンティティを行使／模索する。
 --触れて、変身する。（そして触れる。）

分解と生成のダイナミックな場としての海辺／水辺、
 サーフィン -自己と物とを次々と結びつける。
 --海岸でのサーフィン？

多孔性であり、他の何かを招き入れながら、何かになろうとしている.....（しかし宙吊りになっている）。
 ギリギリのところで.....過渡的に.....。

その揺らぎ、滑り、空洞のエネルギーそのものが、私が賞賛するものなのかもしれない。」

（メモより）



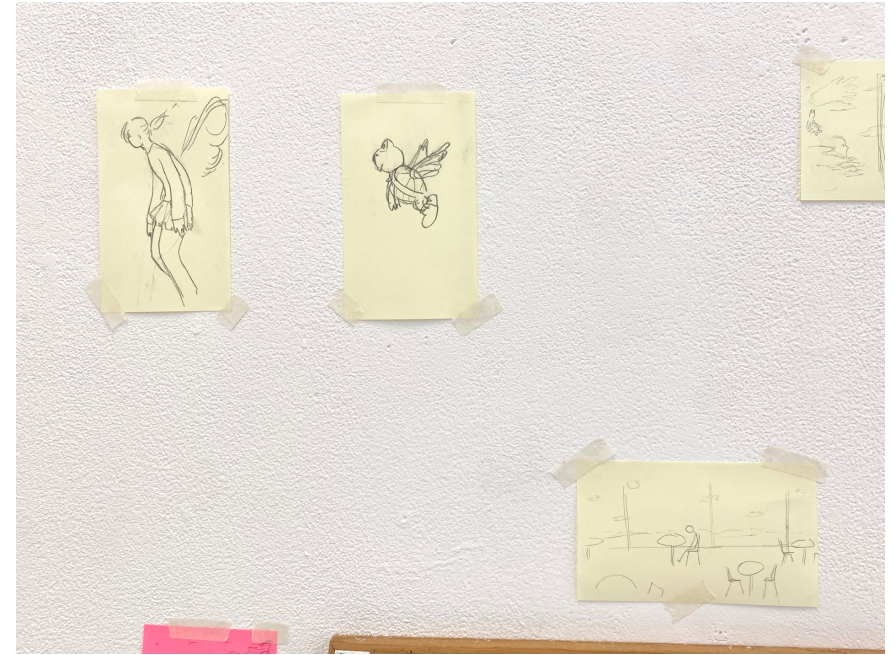
Studio Desk (June)

June 2023, Installation

Exhibited at the SHOW at Camberwell College of Arts







精神世界のイメージを引き出す現在進行的な「ドローイング」の生の姿を提示したいというアイデアから始まった展示。

この展示は、Trans-ient - surfing on the edge / soft and hollow you (前項) 後に作成され、Staging / Matrix (後に収録) へと続くような作品である。Trans-ientよりもドローイングにおいて捉えられる精神の流動や遊戯性そのものにフォーカスしたものであり、Stagingのように未完成性や作品が作られたままアトリエに残されている時の魅力に注目している。洞窟画のようなもの、メンタルスペースと絵画の配置の関係性、アトリエという場について、日常と制作の行き来、幼稚さの言語など、日々考えていることが愚直に出力されたものとしてのスタジオのデスクを作品化した。日常と空想の世界をさまよい、あるいは何かを探る手の動きが、これらすべてを結びつけているのかもしれない。

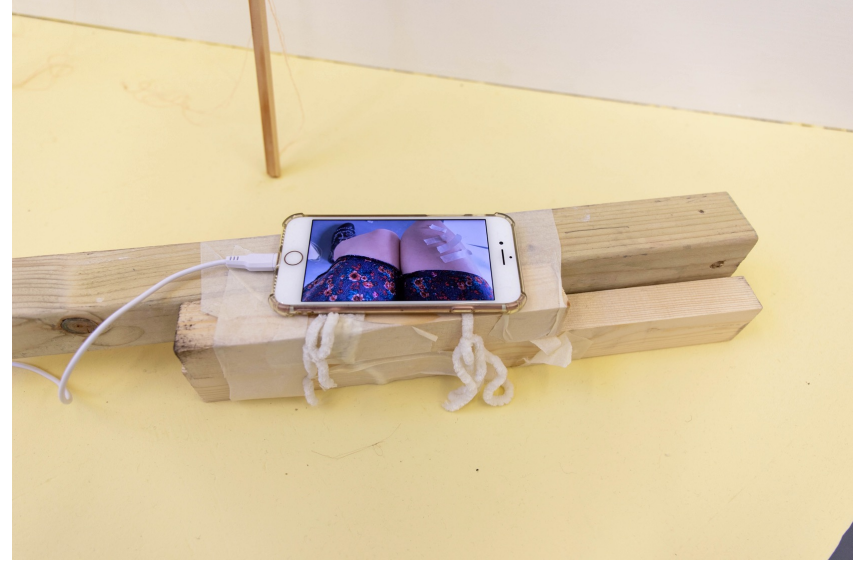
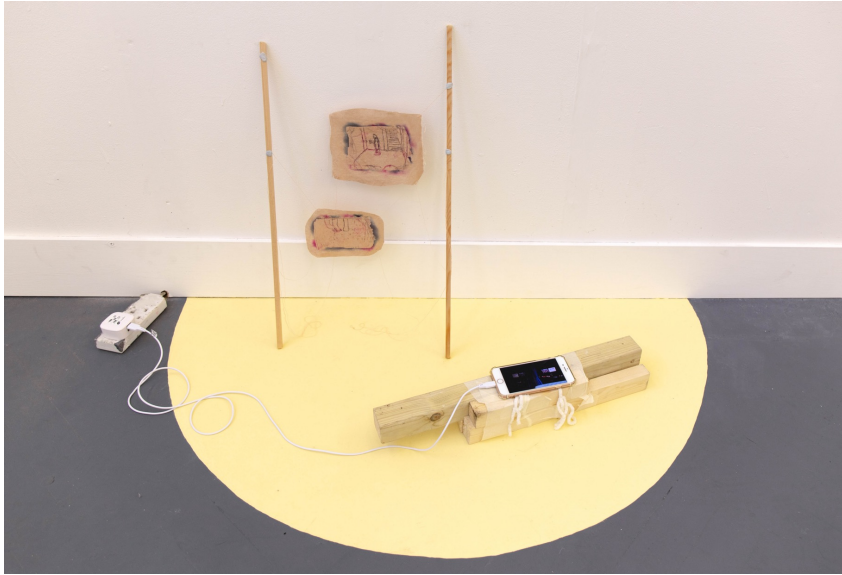
半ば偶然的なことでもあるが、偽物っぽくかつジェネリックなプロダクトがデスクに多く残されており、そこに妙に現実の上滑り感が感じられるのも面白い。

Fragmented, Floating, Bits of Cloth, In Your Body (Island no.3) / July 2023

Exhibited at the SHOW at Camberwell College of Arts









精神の中に流れるイメージのあり方と、それらの身体・建築空間との親和性・緊張関係を翻訳しようとした作品。「微妙な、中間的な」領域を体現しようともしていた。

抑圧的な建築空間に出現した有機的な物体、骨と皮膚（の断片）、ある種の軽みとしかし奇妙な物質性、仮設性と流動性、精神の中の走馬灯のようなイメージの流れ、記憶のとおさ—そういったイメージを持って、あるいはそれらの関係性を探ろうとしていたらこのような展示ができた。

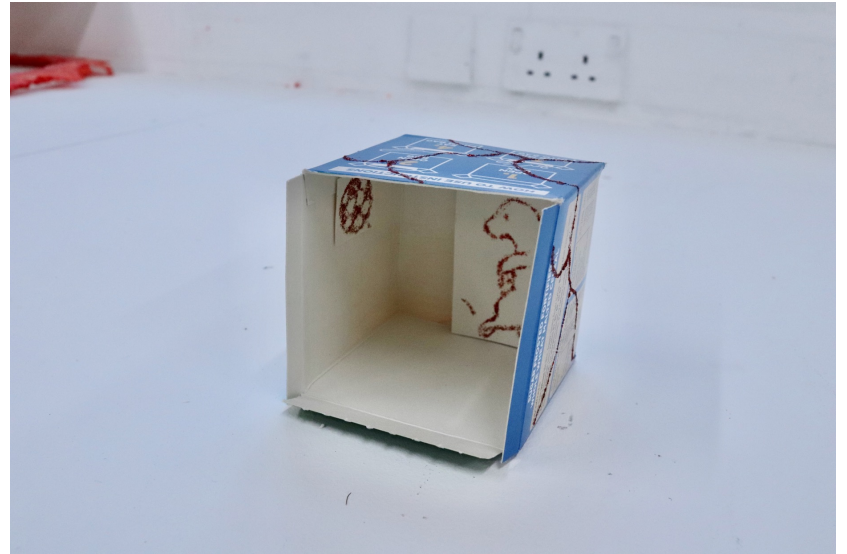
私の学部のバックグラウンドは染色で、特に私たちの研究室では工芸的に発展した防染の技法を使いながら、布に絵や模様を染める技術を極めていた。その意味で、非常に特殊な視覚的言語・方法論が私の絵作りへの入り口のひとつとなった。染めるには染める対象＝メディアが必要で、その布自体もまた不安定なオブジェでしばしば支持材が必要であったりする。また社会的・身体的にも「間」にあるような、我々の日常を生きる身体の感覚を喚起する特殊なメディアでもある。これは布に限らない以後の作品にさまざまな形で影響を与えたが、大学院で研究を進めていく中で精神空間と身体・建築空間の関係や中間的・曖昧なものなどへの興味が明確になり、そのテーマとの関連で改めて布・染色を利用しつつ空間的に表現を試みたいと思ったのである。

この作品には、iPhoneでループ再生されるビデオが含まれている。映像には、遠い記憶のような日常の瞬間や、些細な出来事に対する心の反応、あるいは小さな痒みを掻くような動作が映し出されている。また、インスタレーション全体を通して、呼吸音が静かに響いている。これらはやはり、断片的な言語と、身体と、物語という形では捉えられない身体のアフターエコー、感情や感傷の些細な沈黙物の存在の関係性というテーマを強調しているように思う。



the Backyard of Things - Sedimentation, Crystallization, Ghosts / Dec 2022

Exhibited at the pop-up show at Camberwell College of Arts





このインスタレーション作品は、大学院に入学して最初に制作した作品群である。オブジェや素材と、具象的なイメージ・抽象的なマークメイキング/ジェスチャーとの物理的＝概念的な重なり、些細な感情や思考の表面化というコンセプト、あるいは明確な物語を形成するよりも同時多発的で断片的なプレゼンテーション、それら心理的・知覚的出来事のオブジェクト化とコレクション化、といった、その後の作品にも反映されているような制作の方向性が見えてきた作品である。

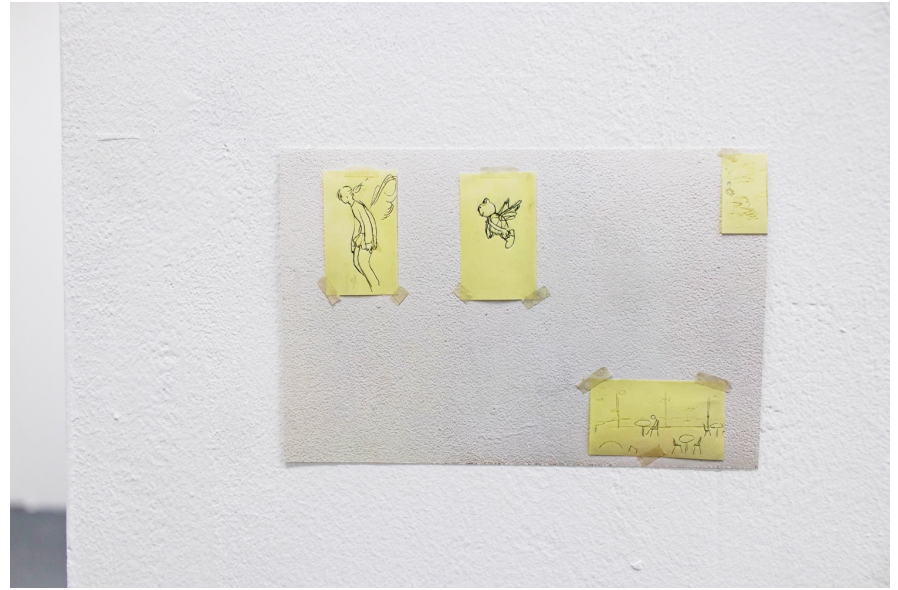
バックヤードの部屋にあるものに番号を振って見せるというこの選択も興味深く、このようなフラットで非階層的な見せ方は、後の作品 *Staging / Matrix* (後ページ) でも特に再検討されている。それはある種暴力的にオブジェの不安定・フラジヤイルかつ魅力的な面を暴き出す技法であると考えている。



Staging / Matrix Oct 2023, installation

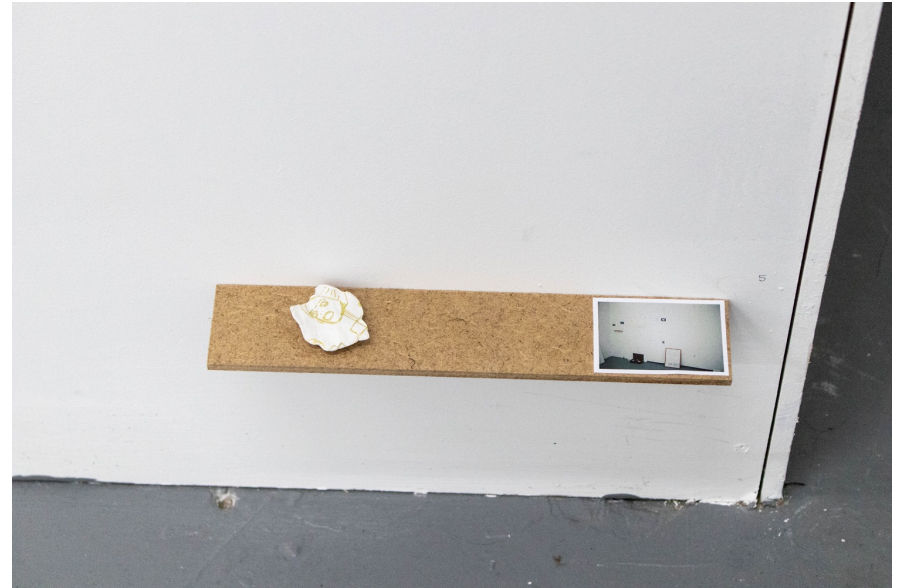
Shown at "I Don't Understand Your Drawing" at Camberwell College of Arts







*真ん中の赤い紙作品はTe Palandjian、左川の壁の小さいペインティングは Xinyue Liangによる作品。他のアーティストとの展示に交わるような展示になっていた。



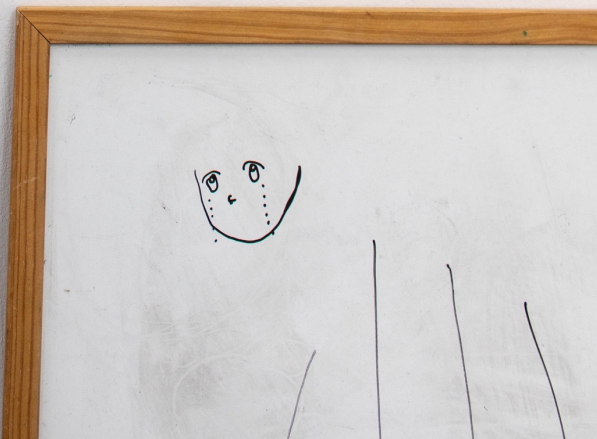


作品とそれをスタジオ内で写した写真が入り混じり、オブジェの「未完成性、プライベート・親密性の提示」を果たすだけでなく、複製や配置に伴う時間・空間感覚の遊びも描き出された。

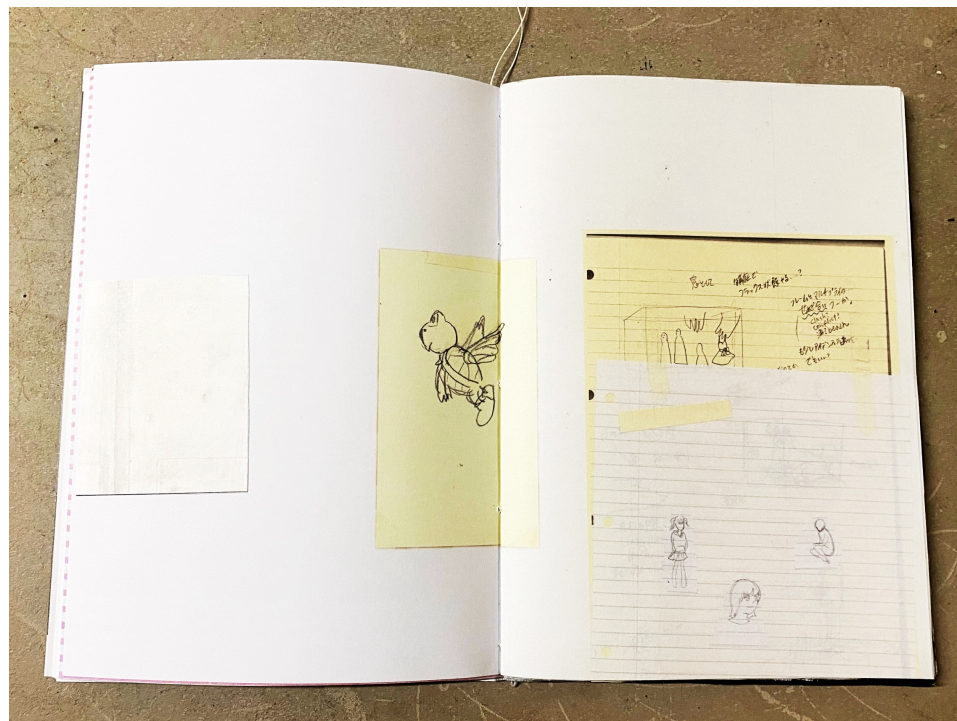
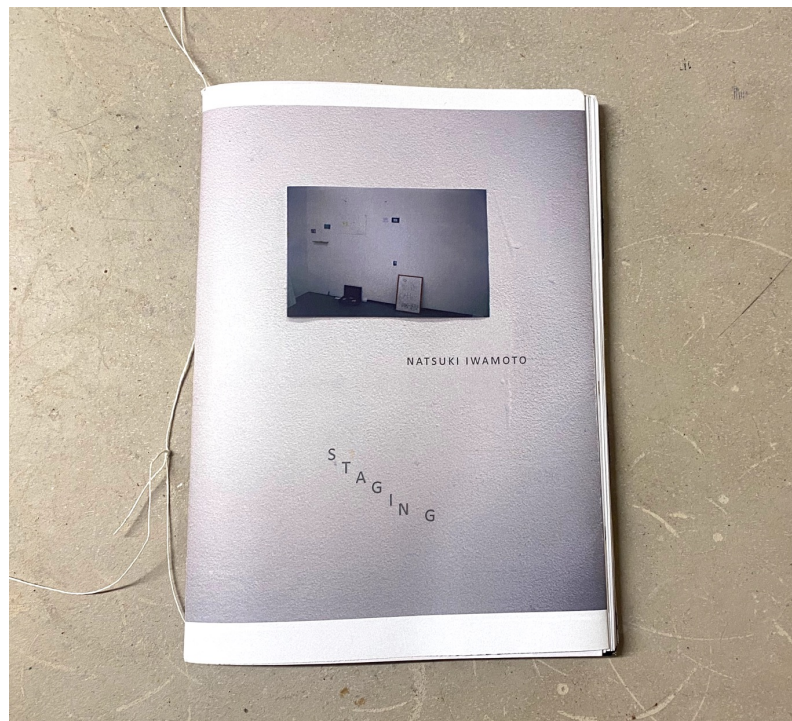
不完全、途中的、カジュアルで流動性を残したもの、アーティストの手から出てきたそのままの感動を残したもの、バックヤードやスタジオにいる作品のフラジャイルだが生き生きとした姿—そういったものを「作品」として提示＝ステージングすることは時に困難であった。本作は端的にいつてこの課題をいかに克服、あるいは違う角度から提示しようかという実際的な実験から生まれた。写真の活用、その物質的な複製物と「本物の」オブジェとの並置はこの作品の特徴となっている。

結果としてその方法論はオブジェクトと我々とのバックヤード的な独特な距離感だけでなく、私の制作における断片的で同時多発的な作品の配置という特徴をより強調させ、それがどのように精神空間・特定の世界観との親和性を持っているかについても考えさせた。また物理的に複製技術と戯れることで時空や存在の感覚が弄ばれるような、不思議な空間を作り出してもいた。

絵画の内容以上にそのあり方・見せ方から精神空間やドローイングという主題について考えたインスタレーションプロジェクトとなった。



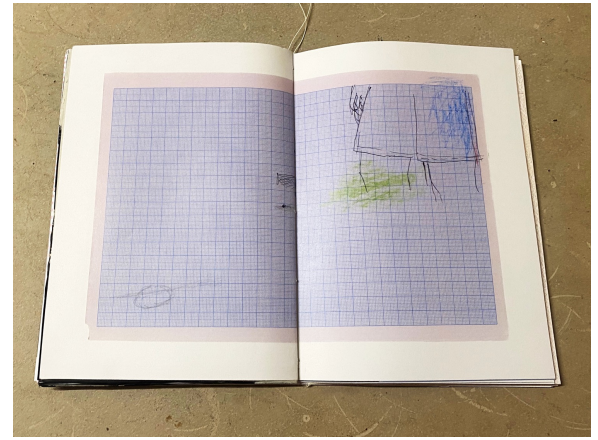
関連プロジェクトー **Staging;** (Zine, Nov 2023)



52 Pages, color pages + monochrome silkscreen-printed pages sandwiched, photographs and photocopies attached on some pages

インスタレーション作品“Staging / Matrix”のアイデア（とそのインスタレーションのドキュメンテーション自体）を元に、本の形に落とし込んだプロジェクト。

自家製本という形だからこそ生まれるプライベート空間・親密さ、誌上の空間での模擬インスタレーション＝複製物の物理性との戯れや配置のジェスチャーの暗示、といった要素が有効活用された。中ページのモノクロシルクスクリーンの荒い版画がオブジェクトとの不思議な距離感を加速させる。



Project / Performance



Poorly Made Shop

Performance / live-making and shop, Nov 2023
Performed at APT Gallery for the exhibition/project
“Research Festival : Making Conversation”

不完全／オルタナティブ／マイナス性（幼稚性）の美学といったテーマや、創作と日常の曖昧な境界を違う形でデモンストレートしたようなプロジェクト。

この頃作品の流通のシステムについて考えていたこともこのパフォーマンスのようなものに繋がった。

「私は特に日本の美学を参考に、この種の「弱い」言語が深層心理との繊細なコミュニケーションを開く可能性について常に考えていた。弱さ／可愛さが、ある種の客体への共感（同情）をもたらし、見る者に一種の愛や、時には治癒の感覚を呼び起こすことに広く興味を持っている。一グロテスクにさえなりうるかわいさの境界侵犯性、攻撃性と防衛の間の不安定な緊張に関係しているユーモアという要素。表面的にも見えるこれらのテーマが、実はとても複雑で人間的な反応であり、社会や鑑賞者に何か特別な癒しをもたらす可能性があると感じている。

Group exhibition (Collaborative installation)



Interzone (Three-Artist exhibition) Jacob Clayton, Te Palandjian, Natsuki Iwamoto

At Peckham Levels, Nov 2023

Above : Installation photos of independent and collaborative works



Interzone installation view, Jacob Clayton, Te Palandjian, and Natsuki Iwamoto / All Photos by Studio Adamson



↘ Small City, 2023, Natsuki Iwamoto and Jacob Clayton, 50x20x70 cm

Including (from left to right): A Piece Of Pine (Skin and Bones), 2023, Pencil on Pine, 8.5x4x4cm (N.I.) // Get Converted, 2023, Found object [pin] 3.5x3.5 cm (J.C.) // Adventure door, 2023, Photo-cut-outs & oil stick on ply (J.C.) // A Piece Of Pine (Laundry Detergent), 2023, Acetate print on pine, 11.5x4x4 cm (N.I.) // Untitled (Pier), 2023, Pencil on wood spoon and tack on timber, 18.5x11x4cm (N.I.)

↑ Matrix, 2023, Postcards, cotton thread, tack
70x42x59.5cm

← Untitled (Flying Turtle), 2023, Photocopy of drawing, 10x6cm

All Photos by Studio Adamson

“ウィリアム・バロウの小説『裸のランチ』（1959年）から引用された「インターゾーン」という語は、現実的パラメーターという安全な場所からの架空の逸脱を表しており、天国と地獄の恍惚と残虐が、人間の感情と経験の振幅の高低を通過しながらエスカレートしていく物理的な場所である。「Interzone」は「international zone」に由来し、税関の例外規定や管理上のグレーゾーンに遭遇するタンジールの場として存在する。そこは不明瞭な政策と曖昧な法律の場所なのだ。”

-- 出品作家およびメインキュレーター、ジェイコブ・クレイトン
によるイメージテキスト （岩本 訳）

「インターゾーン」という共通のテーマ（イメージ）と制作的アプローチを持つ3人のアーティストによる展示。展覧会に向けて合同批評会を継続的行ったり、展示においても各作品がミックスされていく共同的なインスタレーションを制作することで、各々の制作の世界観が加速され、また新たな側面も見出された。物理的な人工物としての「作品」に対する純粹で先鋭的なアプローチや、空間との遊びなど、アーティストたちの新鮮なアート観が随所に見られ、展覧会全体がまさに「インターゾーン」の空間を体現していた。

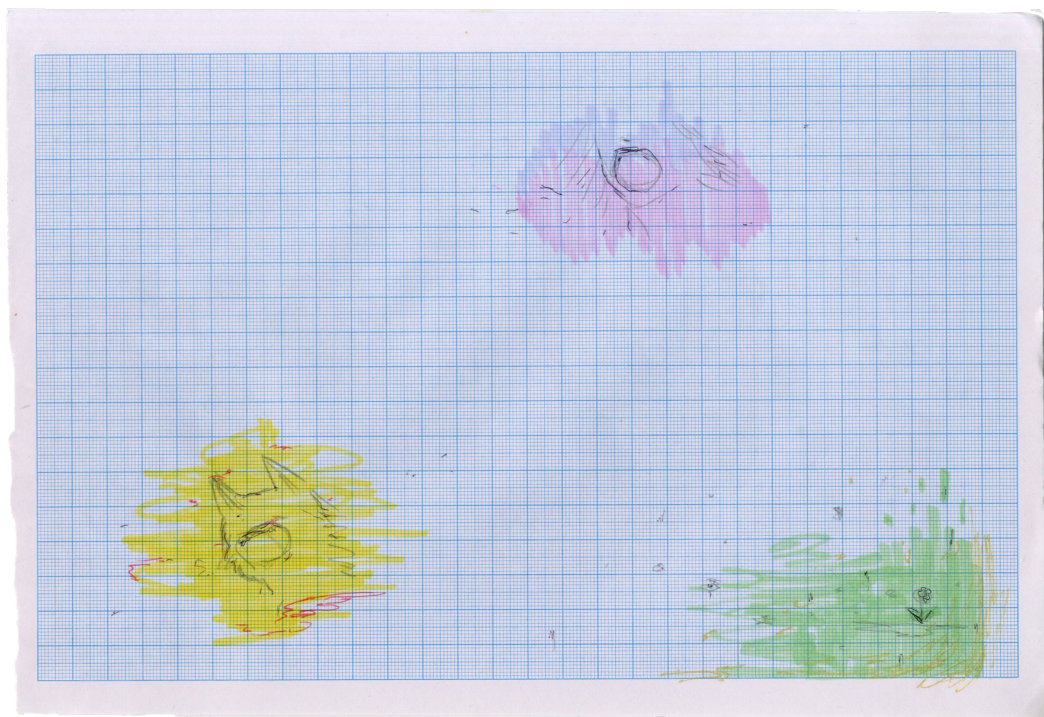
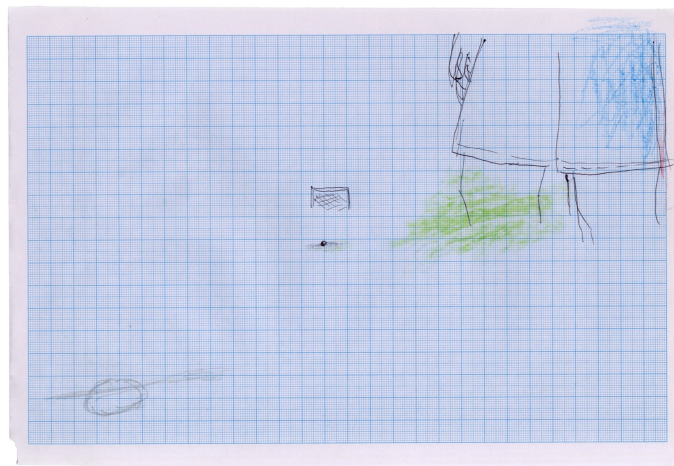
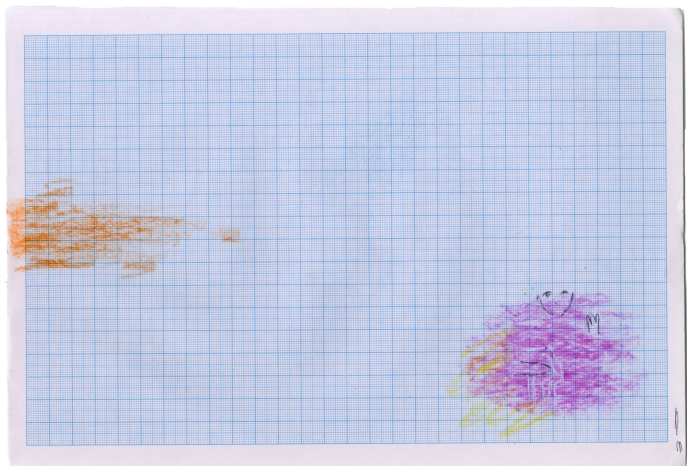


2022 - 23 (Camberwell College of Arts 在学時)
個別作品 (ドローイング、オブジェ、布)

これらの個別の作品でもやはり、断片的で散漫的なスタイル、幼稚的や不完全的な言語、クリエイティビティの萌芽の瞬間を作品に捉えそのまま（弱いまま）提示すること、あるいは日常空間と精神空間、身体感覚の共鳴、それらの感覚を行き来し相互侵犯する絵画遊び、周縁的な、ノイズのようなものの表面化というイメージなど、インスタレーション的实践と共通する要素を探究している。特にこれらの作品はそういった要素が絵画・オブジェクトの中（上）にフラットかつ立体的に凝縮されている。



Untitled (Cat / no face) / Untitled (Cat / with face) / Untitled (Cat/ bitten) , Drawing on paper, pencil and pen, 14.3×14.6cm, September 2023



↖ **Untitled (breeding)**, Drawing on graph paper, pen and crayon, 29.5×20.8cm, September 2023

↑ **Untitled (FC)**, Drawing on graph paper, pen and crayon, 29.5×20.8cm, September 2023

← **Untitled (Crying!)**, Drawing on graph paper, pen and crayon, 29.5×20.8 cm, September 2023



Untitled (Print with sticky notes), Silk screen printing, 35×49.8cm, October 2023

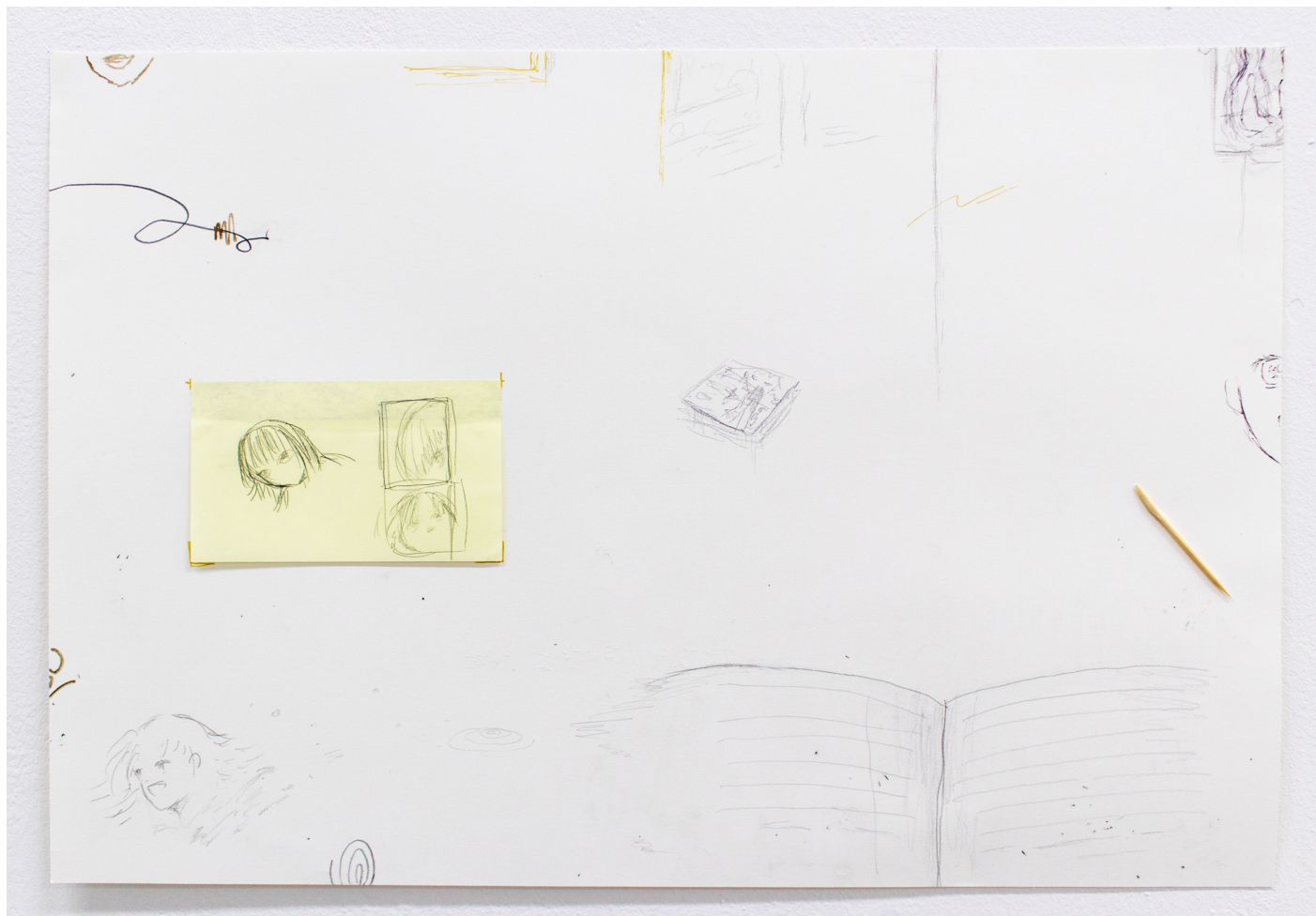


Untitled (Print with drawings of space), Silk screen printing, 34.9×49.8cm, October 2023



← **Untitled (eraser dust / bears)**, Drawing on paper, eraser crumbs, 29.5×20.8cm, September 2023

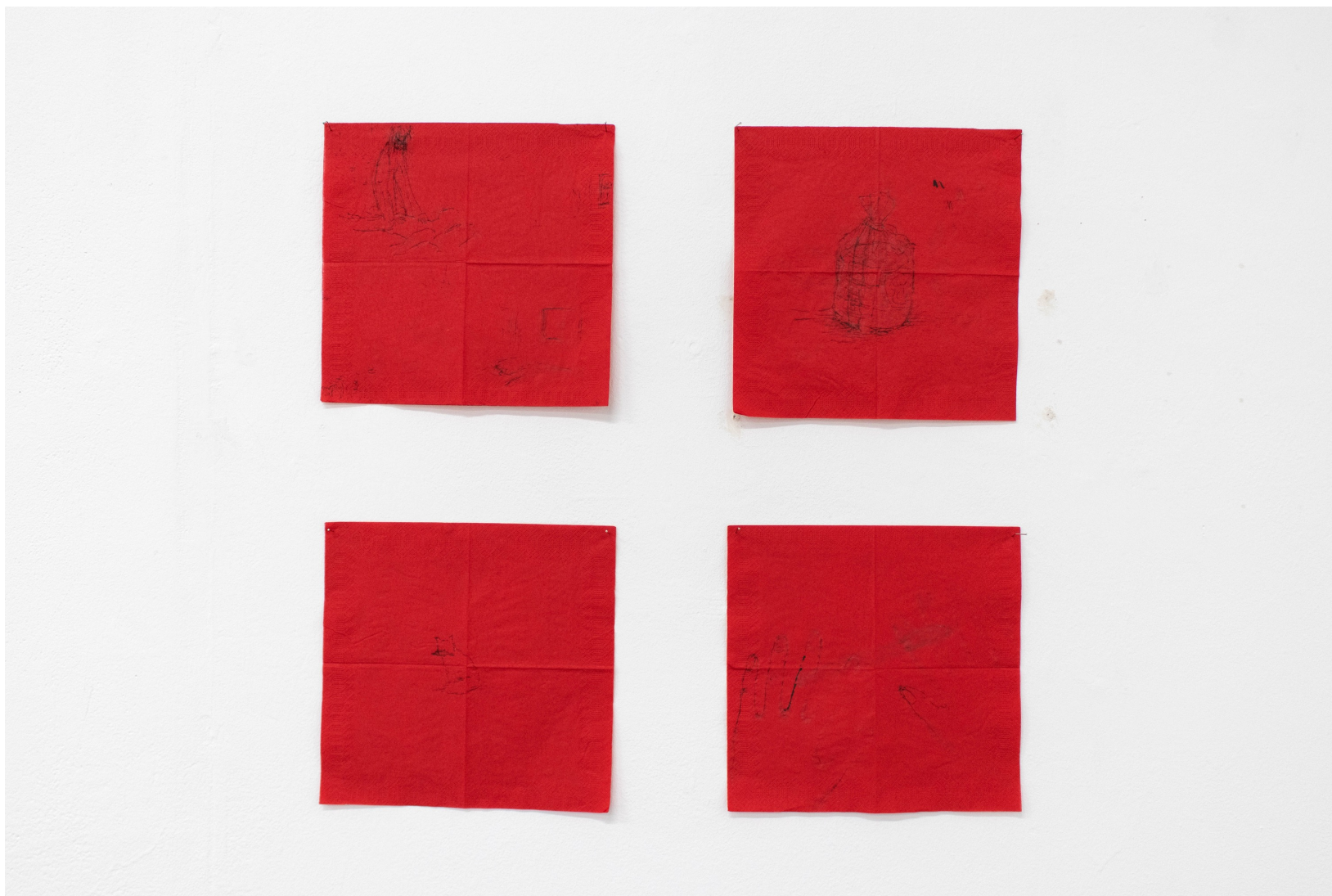
↑ **Untitled (eraser dust / bunny)**, Drawing on paper, eraser crumbs, 29.5×20.8cm, September 2023



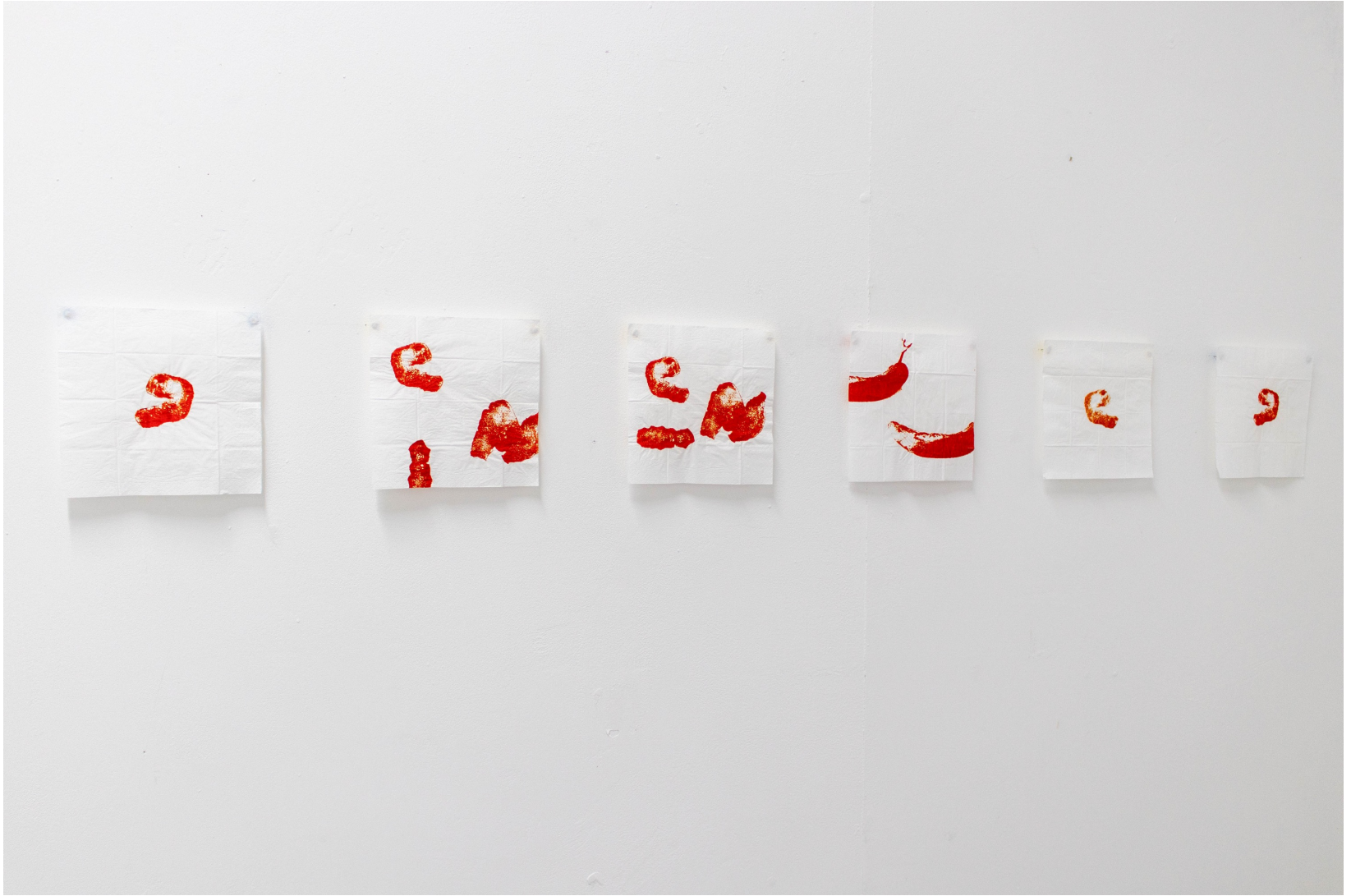
Studio - Mental/Physical/Gestural Space on Paper,
pen and pencil drawing on paper, toothpick, eraser
dust, 29.7 cm x 42.0 cm, Sep 2023

* アートオリンピア入選作品。

「私の制作は断片的な精神のイメージの流れ、お話以前の言葉や声や、未確定な存在や一場面がささめき合うような領域を捉え、それを現実空間に翻訳したり精神・身体・日常空間が行き交うセッションのようなものに発展させたりする。学校のスタジオで描かれたこの作品でも、周囲の空間、精神の反応あるいはジェスチャー、内界に浮遊する曖昧な像が並列している。精神の機微を探る身体的活動の痕跡がこの紙上に立ち上がってくればいい。」



Secret story(ies), A set of 4 drawings on napkins, the
size of napkin:24x24 cm
August 2023



Slipping

A set of 5 prints on napkins, size of napkins; 21x21
cm, August 2023



Mental Space, a photocopy of drawing, found object
(transparent box), 7.5×10×3.5 cm, Jan 2023

Exhibited at Forces of Small: Project for an Artwork
Compacted and Condensed, Fillet Gallery



murmurs: sound BODY aNd MiNd, s set of 3 textile works, textile dyeing, pen drawings, pins
From the Left; 73 x 94, 102x94, 99x93 (cm), August 2023



Selection from Piece of Cloth series



Untitled (a piece of cloth : sofa)
Texile dyeing, 21.8×26.2 cm, June 2023



Untitled (Drawing on a pillow cover)
drawing with pen on a used pillow cover
44.5×74.5 cm, August 2023



Untitled (a piece of cloth : pink and orange)
Texile dyeing, 50.5×12 cm, June 2023



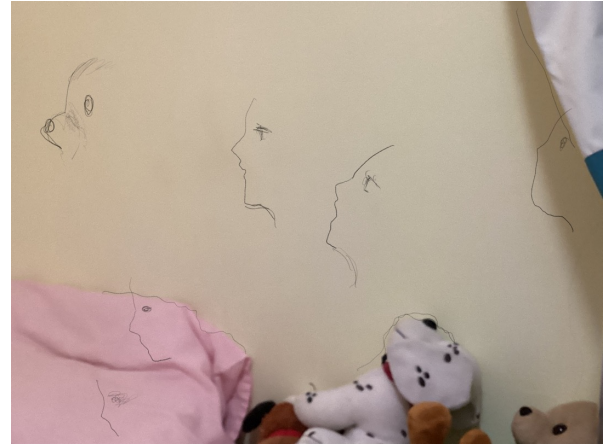
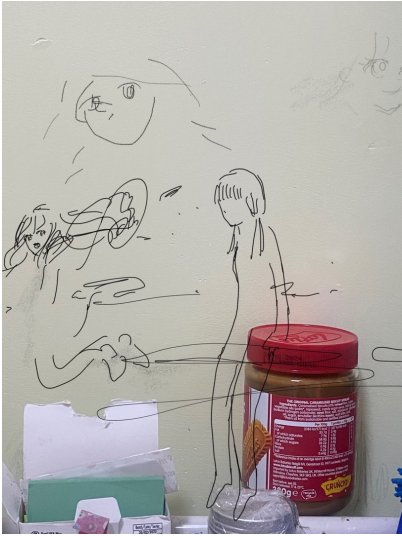
Untitled (a piece of cloth : adolescent)
Texile dyeing, 21×24 cm, June 2023



Untitled (a piece of cloth : under the skin)
Textile dyeing, 8.5×14.5 cm, and 12.2×5.8cm, June 2023

2024ー

「ホームスタジオ」



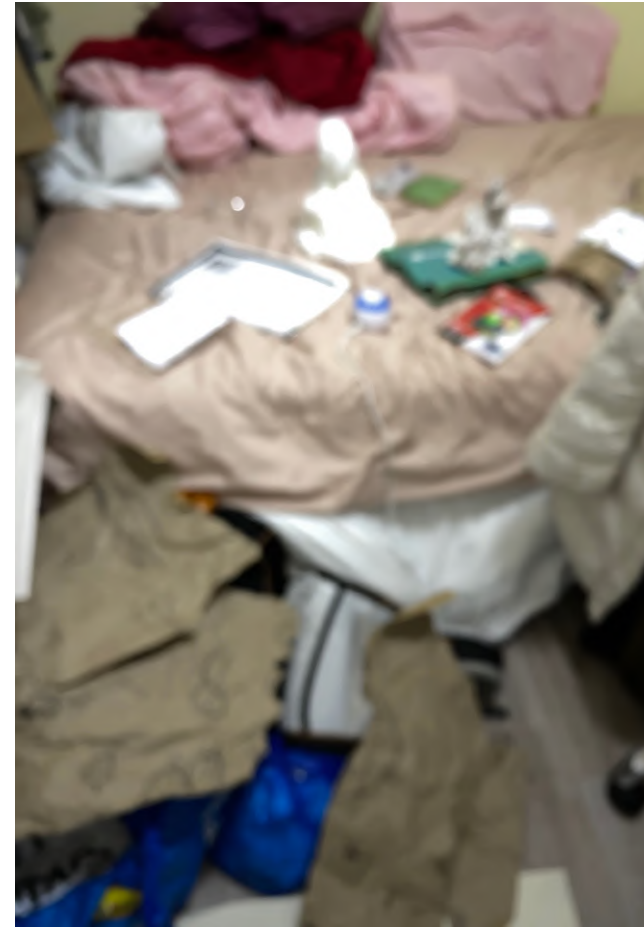
Indoor Drawing Series

Indoor Drawings, digital drawings on photographs, 2160x1620,
Nov 2023

Chapman House Project (2024- ongoing)

当時住んでいたフラットでの制作とそこでの作品展示・撮影プロジェクト







Video work:

A Documentary of the Art works (Bedroom)

2024, video duration 5:33

<https://vimeo.com/955514865>

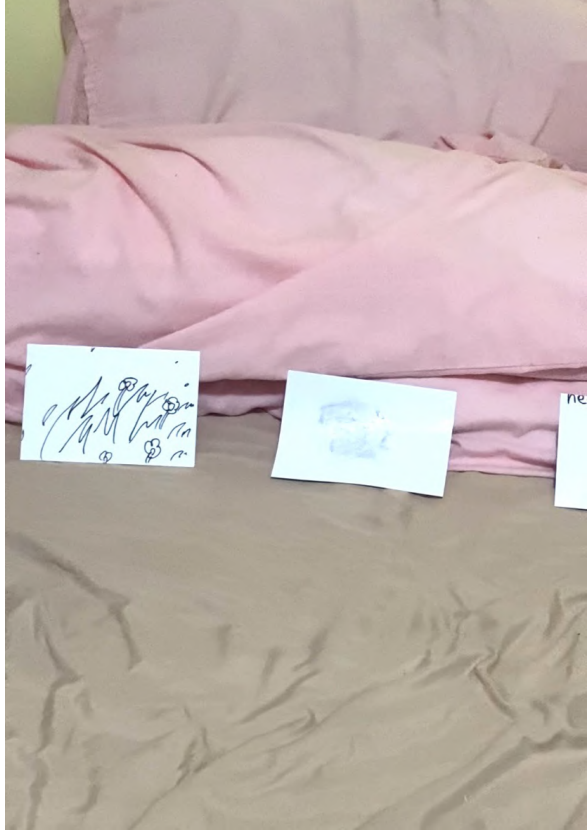
“陸と海の間存在的存在である渚は、生命が生まれ変わる場所である。私たちの身体末端では新陳代謝が行われ、少しずつ生まれ変わっている.....。

――

6カ月間すんだこのフラットは1階にあって、とてもジメジメしていてすぐカビが生えてくる。その湿気に誘われて、ナメクジが現れ増えていき、紙は腐食され飴も溶けていく。現代の人間生活をする上では不快でしかなかったが、人工的な場所でありながら、何か生命やエネルギーの現れを見たような気持ちにもなった。小さいときに住んでいた家の日当たりの悪い部屋でキノコが生えているのを見つけたことがある。それまで浮遊して、あるいは沈殿していた何者かが、ついに形を得て、私の目の前に現れる。家でしかなかった領域のその境界が少しだけ揺らいでいるような気持ちになったことを覚えている。

――

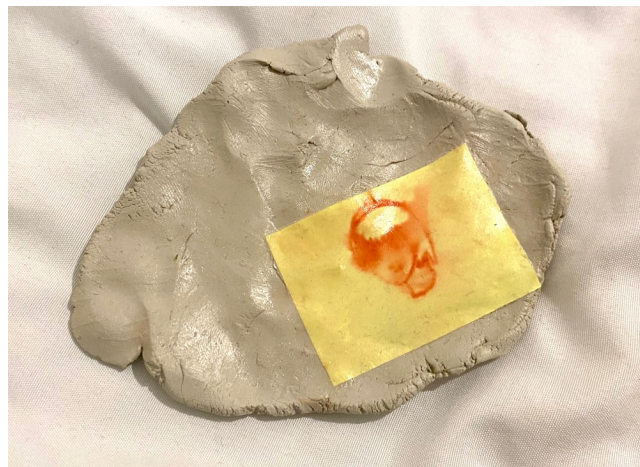
作品(と呼ぶのであれば)は、当時私が住んでいたそんなアパートで撮影された。その場所と共鳴しながらアート作品／プレゼンテーションとしての作品の記録という方法論によりアート作品の不完全性・曖昧性・途中性の魅力、親密さ、そして場所への相互作用／侵入をユニークに伝えている。”

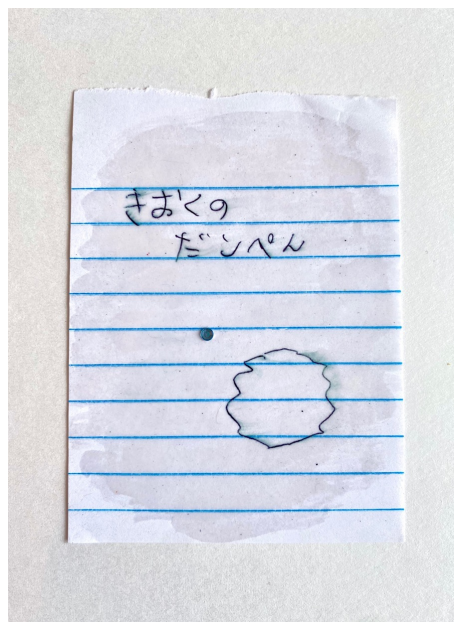


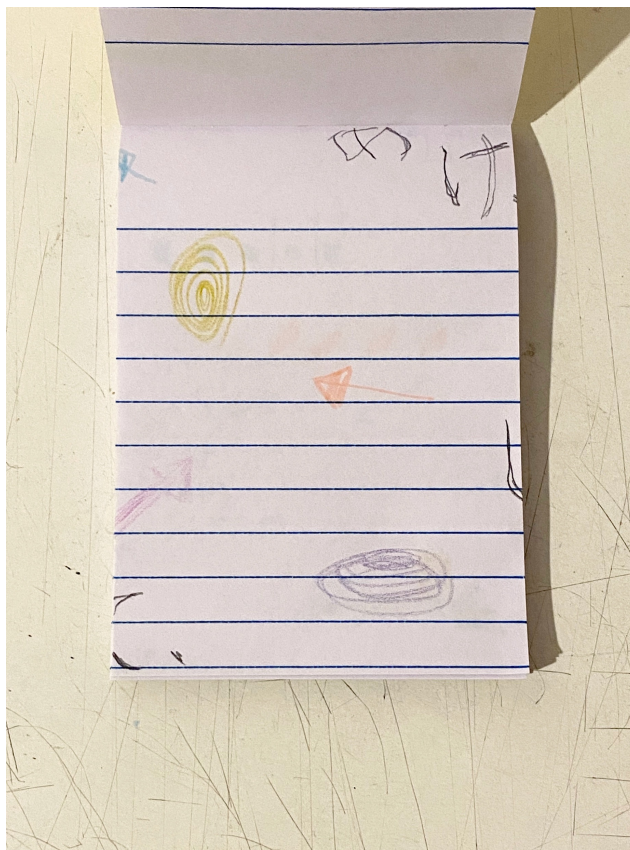
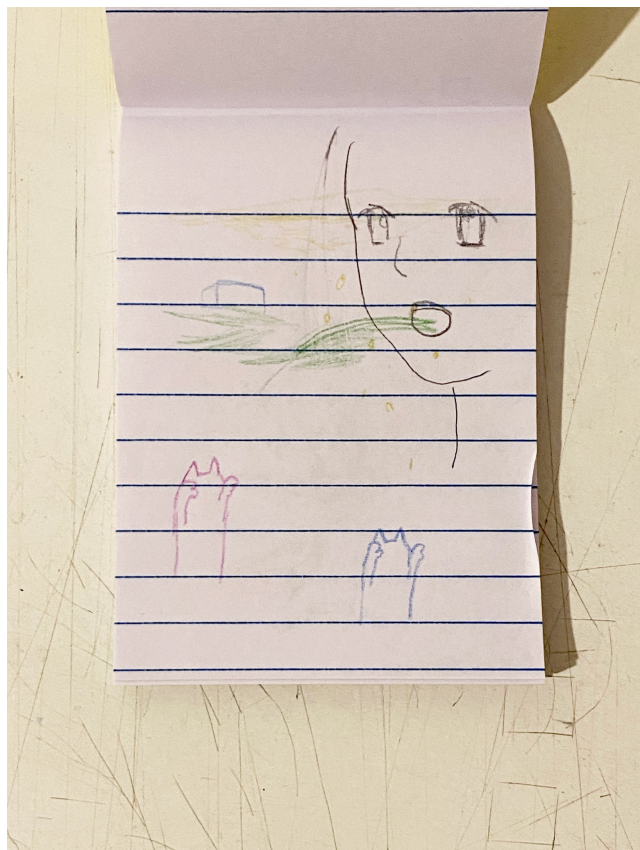




オブジェクト天国 (Pay Money To My Pieces) + noise jam シリーズ (仮) コンピレーション
2024 - ongoing







この時期、学校を卒業し、ある種スタジオ・ワークショップという制作の場を失うと同時に、改めて制作の必然性や制作と日常空間との関係性を考えるようになった。私の思い描く周縁的な声は身近なところにこそ起こりうるし、想像と現実のスリップも家庭空間を利用することでより奇妙なものになる。また小さなもの、断片的なもの「しか作れない」のだが、それが可能にするコミュニケーションの形があるかもしれない。そのような外的・内的要因からこれらのプロジェクトが生まれたといえる。



ミーンミンミンミン... (仮題), 2024

Pen and crayon drawing on sticky notes, 7.5x7.5 + 20.8x14.8cm, June 2023

Natsuki Iwamoto
ナツキ／岩本夏月

<https://natsukiiwamoto.com>

Instagram @natsuki.nako
natsuki391011@gmail.com

Thank you

Natsuki Iwamoto, Last updated: 16 Jul 2024